

金倉 円照 著

## 「インドの自然哲学」

雲 井 昭 善

インドの学派哲学の中で、實在論として特異な哲学体系をもつ勝論 (Vaiśeṣika) は、インド哲学史の上で多くの問題点を提起する。かつて宇井伯寿博士は、一九一七年、勝論学派の典籍で漢訳された『勝宗十句義論』の英訳 (*The Vaiśeṣika Philosophy according to the Daśapadārthaśāstra, Chinese Text with Introduction, Translation, and Notes by H. Uj, London: Royal Asiatic Society, 1917*) を発表され、その評価は国際的のものとなった。このことは、ここに改めて述べざるまでもない。その後、博士は名著『印度哲学研究』の第一、三巻において、この学派に関する成立の問題、「経」の編纂年代、学派の知識論、そして「経」における勝論学説などの画期的な業績を次々とあげられた。爾来、半世紀を経た今日なお、これら珠玉の論攷は、勝論学派研究に最も高度の信憑性をもつものとして、国の内外に評価されている。そこに一貫した博士の立場は「一

学派を歴史的に了解し叙述せむには少くとも、其学派の思想の遠き起源、近き起源、一学派としての成立、経の編纂成立、並に其後に於ける發達等について年代的に定めつつ研究するにあらざれば、其真を得ることは出来ない」(『印度哲学研究』第一卷九頁) と明言したところにあった。

このように、勝論哲学に関する宇井博士の鴻業は、その厳密さと精緻な論究において他の追隨を許さぬ金字塔を樹立したのであるが、爾来、半世紀を経た現在、国の内外にあって勝論哲学に関する論文、著書が公刊され、この面での新資料にとりもなう研究も活潑の度を加えた。そして必然的に、博士によって提起された幾つかの問題に対する再検討を迫られたことは事実である。このような背景の中で、現代における勝論研究に関する内外の諸論文、研究を客観的に把握し、宇井博士による従来の諸論攷をふまえて、ここに新しく一書として公刊されたのが、金倉円照博士の近著『インドの自然哲学』である。著者が本書の序におきて「インドの自然哲学」という書目で勝論に関する論文数篇をここに集めた」と、述べられるように、本書は、自然哲学と題して勝論哲学に関する論攷をもつて飾ったものである。

この書は全体として六篇から成っているが、その中、第二、三篇は、それぞれチャンドラ・アーナンダの訳による「勝論経」の全訳と、プラシャスタパダーの『パダールタダルマサンガラハ』(『句義法綱要』) の和訳であり、他の四篇は勝論哲学に関連する論文から成る。本文三三三頁の中、和訳一六九頁で全体の半数以上を占めていることは、著者が「一般に思想の歴史を

論ずるに際し、まず親しく原典に接することの緊要」であることと、「難解なテキストを理解するために、その翻訳を試みることは基本的に大切な作業」とされる学問的態度を示すものであり、それ故に「公刊の本書も亦、主旨はこれと同じく、従って原典の翻訳が一篇の軀幹をなしている」(序二頁)と明記されている。ここに示された博士の態度は、宇井博士に師事された著者の一貫した研究方針であり、その意味で、今回、宇井博士によって提起された幾つかの問題に対して、本書の教篇の論文の中で再検討の場をもたれたことは、まことに意義深いことと言ふべきであろう。以下において、本書の各篇を概説し、著者の提示された問題点とその理解のあとを辿ることにしたい。

## 二

本書は、第一篇 自然哲学勝論の起源と展開(三一—四五頁) 第二篇 チャンドラ・アーナンダの釈による勝論経の全訳(四七—九四) 第三篇 バダールタダルマサングラハ〔和訳〕(九五—一二三六) 第四篇 勝論と仏教の論争(一二三七—一二七〇) 第五篇 慧月とプラジャスタバーダ(一二七一—一二九七) 第六篇 唯物論の新資料と仏教(一二九九—一三二三)の六篇から成り、巻末に索引(一—三頁)が付されている。

先ず第一篇では七章に分け、テキストを理解するための必要な予備知識とされる一、勝論の淵源と思想的背景から述べている。「勝論経」(以下「経」)の哲学が如何なる思想を背景としてあらわれたか、は、極めて興味深い課題であり、諸家の見解

も一致しない。著者はグラレーゼナップの三種の分類(H. v. Glasenapp: *Die Philosophie der Indier*, Stuttgart 1949, S. 234f.) すなわち(1)チャイナ僧チャルヤ・ローハグッタの三元論(Jīva, ajīva, nojīva)から展開した(2)チャイナ聖典「ストーリータリターニング」(二・一・一二)にみえる唯物論(Lokāyata)に起源をもつ(ヤコービ説)(3)古いミーマンサー学派の一派(ダスグプタ説)を先ず概観し、これに近年の代表的意見として(4)インド古代思想を分つ二大潮流の中の自然哲学とみるE・フラウワルナー説(E. Frauwallner, *Geschichte der Indischen Philosophie*, II Band, Salzburg 1956, S. 15)と宇井説の積聚説を対比させ(5)文献学と祭式学に由来するとみるW・ルーベン説(W. Ruben, *Geschichte der Indischen Philosophie*, Berlin 1954, SS. 190-192)を検討して、「唯一個の思想から勝論を誘導することは妥当性を欠くから、逆に、各種の思索教理を勝論の開祖が一つの体系にまとめて新学説を唱えた」と、著者はみる。二、勝論経の作者と伝説においては、カナダ(Kanada) || カナブデ(Kanabhu) || ウルルカ(Uluka)に因説しつつ羅什訳優楼迦『百論』とその伝説を『百論疏』『成唯識論述記』『因明入正理論疏』などを駆使して詳細に紹介する。三、勝論経の年代においては、年代論を代表するヤコービ説(二〇〇—四五〇、三世紀)と宇井説(1)五〇—150(2)訂正二〇〇—二〇〇)をあげ、四、カナダ以後の学派の推移にあっては、ウルルカーパンチャシキ(五頂) ↓ 慧月への伝承を辿りつつ、有句義存在の論証をめぐるウルルカーとパンチャシキの伝

承プロセスを再現する。かくて漢訳所伝の五頂は、おそらくプラシャスタパーダ流の立場を代表する者とし、ヘウルカカの有を独立とする主張をうけいれなかったという伝説に示唆を与える。この伝説は、六句義をめぐる勝論学派内の主張の対立を暗示し、それが長期に及んだことを示唆している、とみる。

五、勝論経とその註釈では、「経」に対する註釈について、本書(第二篇)に全訳のチャンドラ・アーナンダ積に言及し、この積が現在手にしうる最古の註釈たることを述べ、その他、シヤンカラ・ミシラの『ウパスカーラ』、現存しないが、プラシヤスタパーダよりも古いと推定される『ラーヴァナの積疏』にまで説き及んでいる。六、慧月とプラシャスタパーダにあつては、前者が『勝宗十句義論』の、後者は勝論学派の体系書『バダールタダルマサンクラハ』(『句義法綱要』、本書第四篇に全訳)の著者として、何れも勝論学説に重要な位置づけをもつものである。博士は、慧月の書は十句義(勝論の六句義に有能・無能・俱分・無説の四句義を加える)という、勝論としては全く独自の学説を伝えた貴重な資料たることを、漢訳せられた唯一の勝論経典として歴史的意義の大なることを力説する。後者のそれは、六句義を明確に規定した註釈者としての立場を強調し、徳(性質)の説明に関するプラシャスタパーダの特色を明解に解説する。なお、この両者の年代の前後関係という興味ある問題は、本書の第五篇に委曲をつくして述べられる。本篇の最後を飾る七、その後の展開では、勝論経の成立、学派の基礎、註釈について簡潔に整理し、勝論に体系を与えたプラシャスタパ

ーダの年代を、陳那(Diṅnaga 四八〇—五四〇)との関連から六世紀半以降とみ、「十句義論」の慧月もほぼ同年代としている。そして、プラシャスタパーダの積疏があらわれた以後は、「経」よりもこの積疏の方が重視されたため、これに対する註釈『ヴォーマティー』『ニヤヤカランダリー』『キラナーヴァリ』、『リーラーヴァティー』などに言及する。つづいて、勝論派と正理派との密接な関係―正理勝論派(Nyāya-Vaiśeṣikaと呼ばれる)を説きつつ、七句義を説くシヴァーディトヤの『サプタバダールティー』や、博士がかつて和訳(『東北大学文学部研究年報』第一号、昭・二六)の『タルカパーシー』等、正理勝論合採の綱要書を一瞥して終っている。

第二篇はチャンドラ・アーナンダ(Candrananda)の積による勝論経の全訳であるが、これは一九六一年ジャンプウィヂャヤヂイが出版(*Vaiśeṣikaśāstra of Kaṇṇḍa with the Commentary of Candrananda*, critically edited by Muni Sri Jambuvijayaḥ, Oriental Institute, Baroda 1961. Gaekwad's Oriental Series, No. 136)したテキストによる全訳である。このテキストの発行によって、チャンドラ・アーナンダの積に保存された「経」の章句は『ウパスカーラ』(Saṅkaramitra's *Vaiśeṣika-sūtra-upaśāstra*)のそれに比べて、古い他の文献にあらわれた「経」の引用に遙かに一致していることから、「経」の研究に新しい問題が提供されたこと(⇒インド伝来の配列による「経」全文の和訳が本邦において初めてなされたこと、において、本書における重要な位置づけをもつ一篇というべきである。殊に、経文

が従来のテキストになくて新しい場合、註釈の全文を註記にし、『ウパスカーラ』の解釈との相異をも配慮された博士の註記は、われわれに「経」に対する読解力を更に深く意義あらしめている。このことは、つづく第三篇「バドールタダルマサンダラハ (Padarthaharmanasangraha)」「和訳・句義法綱要」においても同様で、著者の学殖の豊さと厳正なテキスト解釈が余蘊なくにじみ出ている。

かつてガンガナート・ジャー教授がこの『句義法綱要』(以下「綱要書」)の英訳 (*Padarthaharmanasangraha of Prasastipāda with the Nyāyakanḍī of Śrīdhara translated into English by Mahamahopadhyaya Ganganatha Jha, Allahabad 1916*) をなし、又オランダのフマッデモンが六〇〇頁に亘るその部分訳 (*The Vaiśeṣika-System described with the help of the oldest texts by B. Faddgeon, Amsterdam 1918*) を明らかにして以来、なお問題を残しながらも勝論体系を把握するために与って功績の大なるものがあつた。今回、この「綱要書」の全和訳を提供された著者の学恩に対し、衷心より敬意を表する一人である。

言うまでもなく「綱要書」は、勝論哲学を組織的に論述した点で、体系書としての意義をもつものである。徳(性質)としては、「経」の数える十七に七つ(重体・液体・潤・行・法・非法・音声)を加えて二十四を立て、知識論にあっては現量 (pratyakṣa) 相による知 (aiṅgika || 比量) 念 (smṛti || 記憶) 聖仙知 (arsa) の四を立てるなど、「経」との間に思想の発展

がみられる。しかも、一たび「綱要書」の出るや「経」よりも重視され、それに対する幾種かの註釈が加えられたことを想えば、勝論哲学に占める「綱要書」の位置も自明とならう。その意味においても、今回の全和訳は、後進者に賦与された博士の大きな学財とでもいふべきか。

## 三

第四篇勝論と仏教の論争では、仏教側の典籍に破斥の対象としてとりあげられる勝論を、立場をかえて勝論の文献の中で仏教をどう扱っていたか、というユニークな論考で飾っている。凡そ仏教の歴史の中で、いわゆる外道の哲学として最も知られているのが勝論である。提婆の『広百論本』青目の『中論積』をはじめ、『俱舍論』の破我品、『集量論』の現量品等々、その資料は豊富である。しかし、この逆の立場よりする研究は、スチルハッキの書 (*Th. Stcherbatsky, Buddhist Logic, 2 Vols. 1930, 1932*) において正理学派と仏教論理学派との関係に言及したのと、それをうけての正理勝論学派と仏教陳那学派との論争を辿ったシャストリ (*D. N. Shastri, Critique of Indian Realism, a Study of the conflict between the Nyāya-Vaiśeṣika & the Buddhist Dignāga School, Agra 1964*) を中心に代表する以外、この方面の研究は少ない。本書の著者はこの篇において、「綱要書」の諸註釈中、最も著名にして標準的なものとされているシュリーダラ作『ニヤーヤカンダリー』(*Nyāyakanḍī*) をとりあげ、その中で勝論よりする仏教哲学への反駁のあと

を辿っている。その対論は仏教の刹那滅論 (Kṣānikabhāṅga-vāda) をめぐってであるが、この第四篇は、疑難の提出者仏教に対して応答側の勝論という質疑応答の形で『ニヤーヤカンドリー』の原文 (Viz. SS. vol. IV, *The Bāṅsya of Prāsastapāda together with the Nyāyākaṅdali of Śrīhara*, Benares 1895) の七三—八二頁に互る和訳とそれの註解である。ここに、この仏教哲学とは、特に瑜伽唯識派の陳那の系統とされ、「我」の存在と「物」の存在に関して両者間の論難往復のあとを追求する。このように、この第四篇の論攷は、これまでややもすれば等閑にふせられるきらいのあった外教文獻よりみた対仏教との論争という形で、その資料を提供したものである。

さて第五篇では、慧月とブラシャスタバーダという最も興味ある課題をとりあげ、『勝宗十句義論』と『句義綱要書』という、勝論哲学にとって特色ある両書の内容比較によって、両者の年代論を比定しようとする。この課題そのものは(一)「十句義論」と「綱要書」の内容上の相違(二)両書の成立年代の不明確(三)両者の年代の不確定さ、という問題を含みつつ、勝論学派の思想的発展のあとを究明する上で重要な素因となる。本篇における著者の基本課題は、ブラシャスタバーダを先とし慧月を後の出生とする宇井説と、それに反対の立場、すなわち慧月を先としブラシャスタバーダを後とするフラウワルナー説の依って以て立つ根拠をそれぞれ再検討する中で、著者自身の年代論に關する説をうち出そうとしている。宇井説のそれは「十句論」の英訳序にみえるように「ブラシャスタバーダはウッドヨータ

カラよりも古く、陳那よりも新しいから、六世紀の前半、或いはむしろ五世紀の後半に在せし……慧月は六世紀前半よりも古いことはない」とし、慧月のブラシャスタバーダへの依存を主張してブラシャスタバーダ→慧月とみた。これに対するフラウワルナー説は、慧月をブラシャスタバーダに先行するとみた。

(*Geschichte der Indischen Philosophie*, II Band, ; Candramati und sein Dasapadarthaśāstram, *Studia Indologica*, Festschrift für W. Kiefel, Bonn 1955) ここでは、慧月を五世紀とし、ブラシャスタバーダを六世紀後半とみている。その立論根拠は、慧月を「範疇論に正しい権利を与えようとして、自然哲学の全部の古い遺産を犠牲に供したばかりかある体系の全構造を根底から新しく形成する大胆な革新者 (ein Kühner Neuerer) とし、その彼が古来の六種に新しく四種を加えた結果、これに反撥し、古典的勝論体系に究極の形を与えたのがブラシャスタバーダで、『範疇の性質の約説』(“Zusammenfassung der Eigenschaften der Kategorien” *Pāṭarīthadharmasāṅgrahā*) と名づけて学派の正統説を再建した (op. cit. S. 186) 。”。

本篇で著者は、両説の相違点を明確にしつつ「両者(慧月とブラシャスタバーダ)の前後に關する究極の決定は外的な史料によって行なうことはむづかしく、むしろ内容の比較によってなざるべき」ことを力説(二八五頁)しながらも「年代の前後は、両者の内容の比較からは決定しがたい」(二八九頁)として、別の方途を模索し、提示する。すなわち、「十句論」の中にブラシャスタバーダに説かれていない事柄(例えば①円体②

欲隕の原因に「邪智を待つ」という説)があつたり、逆にブラジャスターバダにあつて「十句論」にない場合(例えば「経」にはあつて勝論体系の重要概念の一つ熟変や、世界創造説の如き)もあること。しかしこれらの相違もさることながら、それにもまして両者の立場を根本的にわかつかう問題、すなわち六句義と十句義という相異点が残ること、等である。その中で、博士は慧月の特色たる「無説句義」に注目し、フラウワルナー説に対する疑念、すなわち「慧月の改革が正統派の反対論を誘致したのなら『句義綱要書』に慧月の無説句義に対する反論があつてしかるべきである」と、疑問を投げかけている。

このように、宇井説、フラウワルナー説の全く相反すると思われる両説に対し、著者は「二つの書について一が他を予想するという負荷の関係を明示する材料は求められず、独立に、並行の状態を示している」から、「慧月とブラジャスターバダがそれぞれ勝論の違った部派に所属し、ほぼ同時代に存在したという可能性も否定せられない」(二九六―七頁)として、なお問題を今後に残している。

第六篇インド唯物論の新資料と仏教では、一九四〇年刊行のヂャヤラーシ・バッタ(八世紀)の『タットヴァ・ウパプラヴァ』(Tatvopplavasthā)の内容紹介と研究である。著者はこの篇で、この書の概要を述べつつ(一)インド唯物論に関する独立作品であること、(二)成立当時のインド哲学学派の認識論を難駁の対象とした点に、重要な資料的意義がある、とみている。特にこの書『タットヴァ・ウパプラヴァ』の立場は、普通に唯

物論ローカーヤタ説と承認される①四大の實在と②現量の一量のみを認めるという二点をすら許さず、その点、ローカーヤタの始祖ブリハस्पティに依存、帰依しながらもむしろ不可知論の一種、あるいは断滅論とみうることを著者は注意する。そして、このような唯物論的立場(すべての量を否定する)を、ヂャヤティルレーケーの三種の唯物論(K. N. Jayatilaka, *Early Buddhist Theory of Knowledge*, London 1963, p. 46 ff.)に比定し、更にその第三説がニヒリズムの断滅論に該当するとうワルター説(A. K. Wadler, 'Early Buddhism and Other Contemporary Systems' in *BSOAS*, Vol. 18, 1956)を紹介して終っている。

#### 四

以上、本書の各篇について、博士の論放のあとを限られた紙幅の中で辿ってみた。そしてその一篇一篇が、勝論哲学研究に不可欠の要因たるばかりでなく、宇井博士にはじまって現代に至る勝論研究の諸論文を縦横に駆使しつつ、われわれを勝論研究の原点に近づかしめようと配慮されていたことに気づく。本書においてなされた二つの和訳は、われわれに勝論体系への門を開かせ、他の四篇の論放は、この学派に内在する本質的な問題を明記しつつ、そのあるべき解決への方向を示唆してあまりある。博士の『印度古代(中世)精神史』にはじまる幾多の著書もそうであるように、本書の叙述も亦、明解にして精緻、読者の理解を容易ならしめている。ただし、勝論哲学研究に欠

くことのできない良書であることを記して擱筆する。

(昭和四十六年四月、平楽寺書店A五版、本文三一三、索引一三  
序三他、定価三、八〇〇円)

〔附記〕

この一文において筆者は、著者の意見があるいは誤解したかをおそれる。もしそうした点があったとすれば、それはすべて筆者の責任であることを附記したい。本書にはほとんど誤植はみられないが、一見してそれとみられるもの(目次一頁九行チンドラ→チャンドラ。九七頁三行 vol. iv→vol. IV. 二四五頁八行 卓越 (stisaya→atisaya) がある。

なお、本書三二二頁の註②において著者の提起された問題点に関し、私見を述べてみたい。

かつて私は、初期佛教資料においてローカーヤタが(1)アジタの代表する唯物論と(2)サンジャヤの詭弁論の二義をあらわすことを述べた。いま、現量を含め一切の量を否定する唯物論(チャヤティルレーケによる三種の唯物論の第三。それはチャヤリンの主張と重なる)的立場を断滅論とみるチャヤティルレーケの見解は、『相應部』第十二・四十八經(Tokayatika, SN, II, p. 77)に対する註釈(SN, A, I, p. 76)などによって首肯されうる。すなわち、前出經典では、四種のローカーヤタ(①一切は有なりと説く②無なりと説く③一なりと説く④別異なりと説く)を列挙する。それに対する註釈では①と③とを常見

(sasata-ditthiyō) ②と④とを断見(uccheda-ditthiyō)と解釈する。ここで別異(puttatta)を断見に解しているのは、「最初にあったものが後には存在しないから、断滅に因して問うているのである」とみる。したがって、「すべては無い」という説と「すべては別異である」という二つを断滅論に含めたのである。

これに対して、私の第二義、すなわちローカーヤタをサンジャヤの詭弁論とする立場は、これらの唯物論とどうかみあうか。右の相應部註によると、唯物論者とは「詭弁論なるローカーヤタに熟知せる者」とある。ここでローカーヤタを詭弁論(vitandasaṭṭha)となす解釈は他の箇所にもみられ(拙著一三頁以下)ローカーヤティカを広く世論を語る人(Tokakhatika)におきかえて「世間に関する詭弁の論を立てる一派」とする解説が成立した。かくて、世界の起源なり、一・異・有・無を論ずる徒を広くローカーヤティカとみなすようになり、こうした立場は、佛教側よりみて遮道無益論としてしりぞけられたのであろう。けれども、ローカーヤタの本義からすれば、アジタの唯物論が主流でサンジャヤ的ローカーヤタは本義ではない。(拙著一八頁以下)それにもかかわらず、後代の大乗經典においては、サンジャヤの詭弁論をローカーヤタとみていることも否定したい事実である。それは、まことにニカーヤにおける世論に巧みな詭弁説(vitandavadasattha)としてのローカーヤタ説を継承しているといわねばなるまい。